

【研究ノート】続・西海の鏡
—倭王権はどこからやって来たのか—

古門雅高

はじめに

標題の西海とは、長崎県本土部と平戸諸島、五島列島およびその属島を指す。同地域は古墳文化の中心である畿内からは遠く離れ、九州でも同文化の中枢である北部九州の周辺部にあたる。古墳文化の象徴である前方後円墳こそ分布するものの、その数はきわめて少なく、埴輪も壺形埴輪以外は未発見で、このような状況で果たして古墳文化と呼べるのかという本質的な問題もある。本稿では、このような西海の古墳文化の有り様の議論は一旦横に置いて、同文化の周縁地域である当地での鏡の概要、流入経路および流入経緯を地域集団の動向と絡めて述べて倭王権とその親和的勢力が、いつ、どこから、どのようにして本県本土部に進出したのかと言う問題を考察する。

なお、西海の地は地理的、地形的な要因から集落も少なく、その規模も小さい。住民の一部は海民や海人で、常に陸上で寝起きしていたかどうかは定かではない。そのため集落の動向が把握しがたい現状がある。幸い当地ではこれまた地理的、地形的要因などから地域集団は一定の場所に留まり、流動性がきわめて小さい。したがって集落以外の考古資料を用いれば、その動向を把握することは、さほど難しくない。当地の考古資料の特質ゆえである。

また本稿では一部敬称を略させていただいた。



第1図 本稿の地域区分

1 地域区分

長崎県は、離島を含む陸海の県域の中に九州島が入る広さを持ちながら、律令時代の本土部には、松浦郡・彼杵郡・高来郡の、わずか3郡しか設置されなかった。しかも松浦郡にいたっては隣県の佐賀県にも及ぶ広さである。律令時代の郡の領域が、人文的・地理的な要因によって形成されたものであり、古墳時代にも適用できるのであれば、本稿の地域区分もこれに準じてよいと考える。本県のような海に囲まれ平野に乏しい地域では、陸より海が生活の基盤となる。そのような意味で、律令制の当地の郡域は、海域ごとにまとまりを見せており、近世まで見通しても、この領域区分が地域史に通底していることが理解される (第2図)。

したがって本稿では、上記のような領域が古墳時代まで遡っても、地域史的に有効であろうと仮定した上で論を展開する。その際、旧郡名を「マツラ」「ソノキ」「タカク」



第2図 本稿関係の海域名

と片かな表記とした上で、マツラに属する平戸島（平戸市）を中心とした地域を旧郷名である「庇羅」にちなみ「ヒラ」と呼ぶ。さらにソノキの西部（西彼杵半島西部及び長崎半島西部）は、縄文時代前期より五島列島と土器や石器さらに埋葬形態に共通性がみられるため、旧郷名の「スカ（周賀）」を用い、その五島列島は本土部として整理して「チカ（値嘉）」と呼称する（第1図）。

2 研究史

本県本土部の鏡の研究は少なく、宮崎貴夫の論攷（宮崎 2019）と、筆者のそれが挙げられるぐらいである（古門 2023）。地域集団の研究となるとこれまで筆者の論攷（古門 2024a）以外になく、さらに古墳時代における倭王権の本県本土部への進出の具体的様相の研究は皆無と言ってよい。

3 鏡の概要

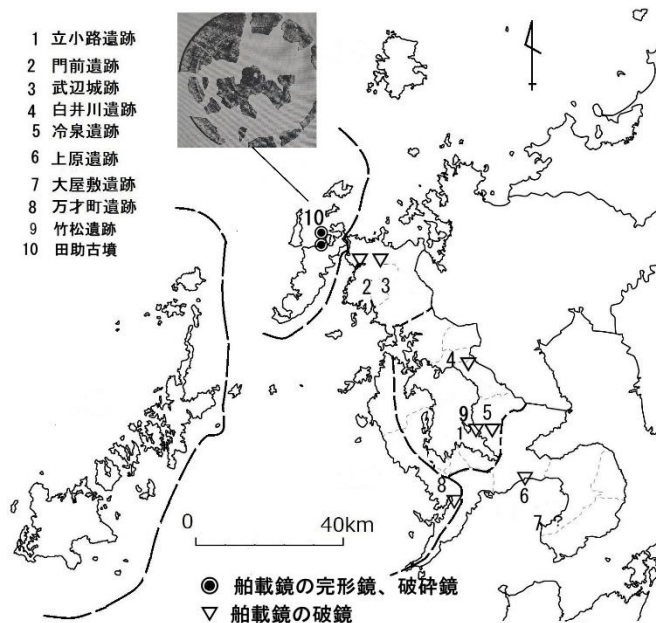
（1）弥生時代終末から古墳時代初頭の鏡（第3図）

当地では前漢鏡の完形鏡ないし破砕鏡の出土はない。しかし前漢鏡の可能性のある鏡片がソノキの大村市立小路（たてしょうじ）遺跡（第3図1、第7図7）、マツラ西部の佐世保市門前遺跡（第3図2、第7図3）、タカクの諫早市上原（うわばる）遺跡（第3図6、第7図11）の3遺跡で出土している。いずれも包含層から出土した破鏡である（註1）。

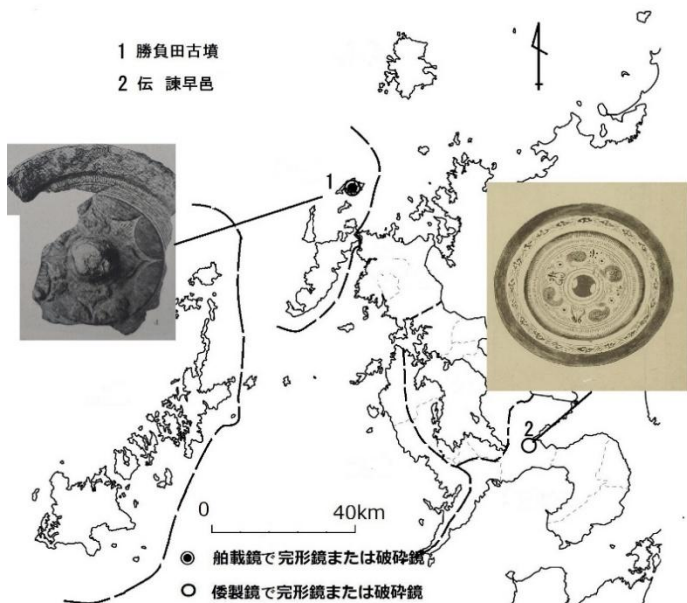
後漢鏡では田助（たすけ）古墳（第3図10）の上方作系浮彫式獣帯鏡（第7図2）

（京都大学平戸学術調査団編 1951）がある。完形鏡か破砕鏡か判断がつかねるが、発見は1928（昭和3）年で、1950（昭和25）年に京都大学が調査した石棺墓に隣接していたと見られるものの、詳細は不明である。古墳と称されているが、共同墓地を構成する他の墳墓からみて実際は石棺であった可能性が高い。

筆者はかつて同鏡が全国的には弥生時代終末から古墳時代前期まで副葬されていることを根拠に同古墳の時期を弥生終末から古墳前期と幅広に設定したこと



第3図 弥生時代終末から古墳時代初頭の鏡



第4図 古墳時代前期から中期初頭の鏡（縮尺不同）

がある（古門 2022）。しかし近年の辻田淳一郎による九州出土の同鏡の年代観（辻田 2021）や宮崎貴夫の同古墳副葬品の検討（宮崎 2019）から見て、今は弥生時代終末に位置付けられると考えている（註2）。

田助古墳や、次項で検討する勝負田古墳の両遺跡は壱岐水道に面する離島に存在しており、新来の前方後円墳ではなく在地の墳墓であることが注目される。出土した鏡は従来から海上交通の要衝を押さえる有力者に下賜されたと理解されてきた。

（2）古墳時代前期から中期初頭の鏡

①勝負田（しょうぶた）古墳の長宜子孫銘内行
花文鏡（註3）

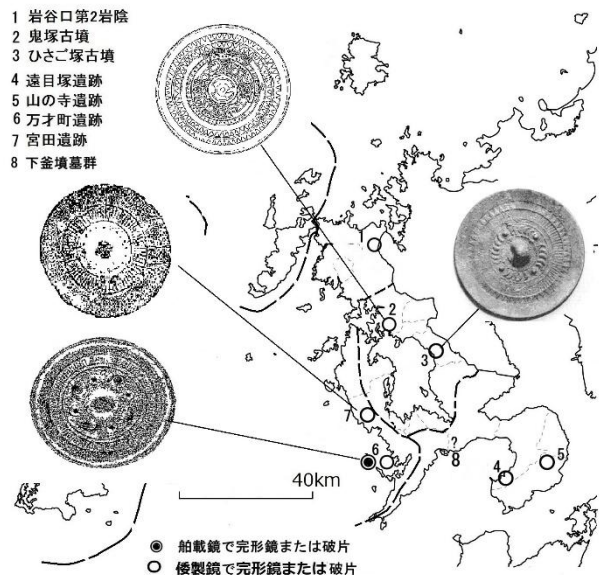
同遺跡は平戸本島から離れた的山大島（あづちおおしま）に位置する（第4図1）。同鏡（第8図

14）が完形鏡か、あるいは破砕鏡かという問題は、本鏡が所在不明であることも手伝って確認できない（京都大学平戸学術調査団 1951）（古門 2022）。出土状況は昭和 16、17 年頃の不時発見であり、詳細は不明な点が多い。筆者は発見者の証言を根拠に同古墳の主体部を石棺ないし石棺系石室と推定し、4 世紀後半から 5 世紀初頭に位置付けた（古門前掲）。

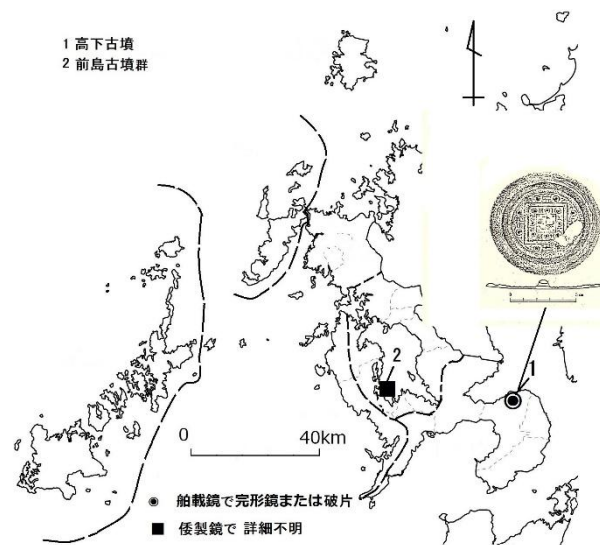
②伝諫早邑の鼉龍鏡（四獣鏡）

同鏡は伝承であるが、諫早邑（第4図2）から出土したと言われている（第8図13）。倭製鏡で完形鏡である。下垣集成では鼉龍鏡（だりゅうきょう）とされ（下垣 2016）、鼉龍文の頭部などと共通するモチーフが用いられているため、鼉龍鏡との関連が深い鏡であることが分かる。

この鏡は漢学者市河寛斎（1749～1820）が執筆した『宝月楼古鏡図譜』の中に記録されており（杉本 2016）、下垣によると同類の鏡は岐阜市の 4 世紀後半に築造された円墳である龍門寺 1 号墳からも出土している（下垣 2016）。下垣は古墳時代前期後葉頃に古墳が不在であった「地域に突如として出現する古墳には、高頻度で倭製鏡が副葬されており、畿内中枢勢力が鏡の配布をつうじて広域的な政治関係を積極的に構築していた姿を復元できる。とはいえ、その面径の小ささは、評価がさほど高くなかったことを示唆する。」（下垣 2022 p.168）と本鏡が有する歴史的意義を記述している。出土遺構などその詳細は不明だが、下垣説に準じて当該期に位置付けた。以上のように古墳時代前期では資料の絶対数が少なく、鏡を通して



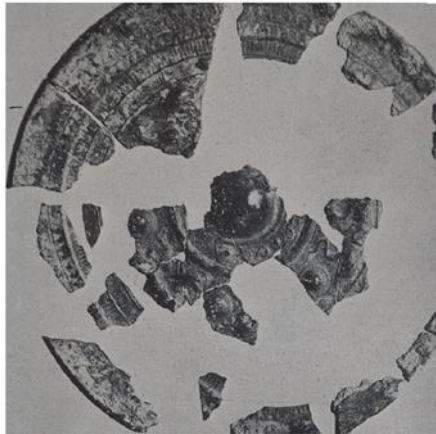
第5図 古墳時代中期の鏡（縮尺不同）



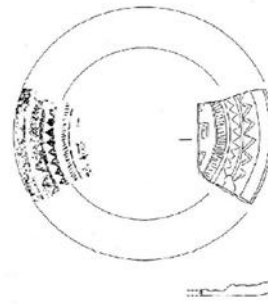
第6図 古墳時代後期の鏡



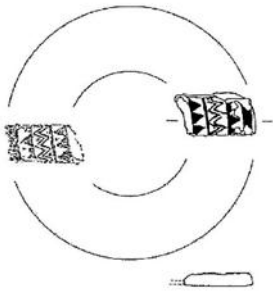
1 田助 (縮尺任意)



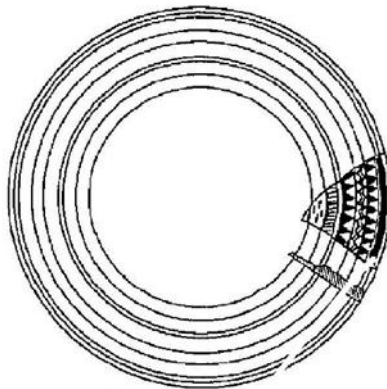
2 田助 (縮尺任意)



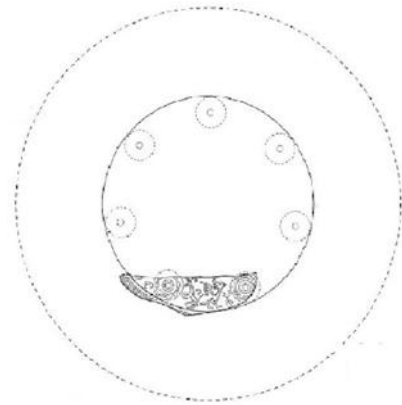
3 門前



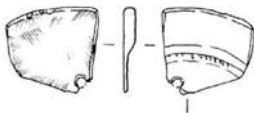
4 武辺城跡



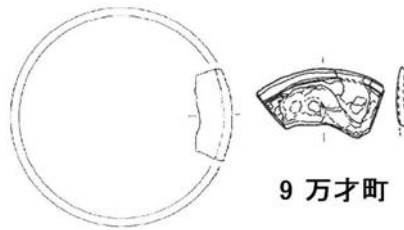
5 白井川



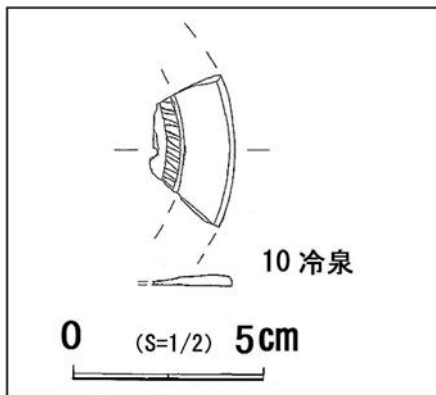
6 竹松



7 立小路



9 万才町

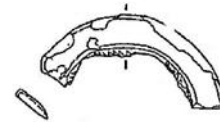


10 冷泉

0 (S=1/2) 5cm

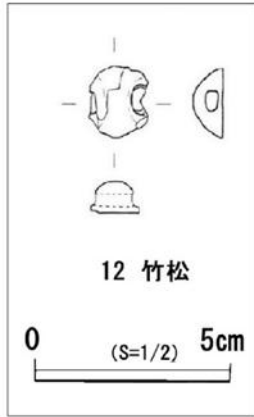
8 大屋敷

0 (S=1/3) 10cm

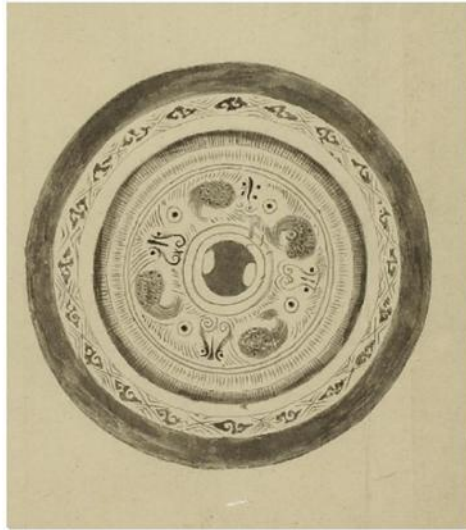


11 上原

第7図 肥前西部の鏡① (S=1/3)



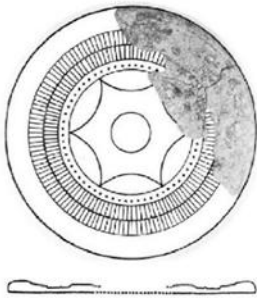
12 竹松



13 伝諫早村



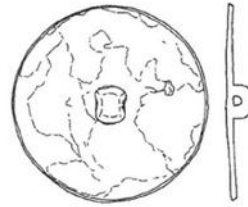
14 勝負田



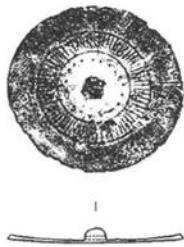
15 岩谷口



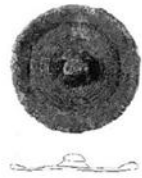
16 万才町



17 万才町



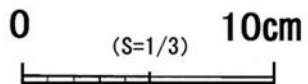
18 宮田



19 山の寺



20 鬼塚



第8図 肥前西部の鏡② (S=1/3)

当該期の具体的な政治社会状況の言及はできないが、前方後円墳の出現が前方後円墳集成編年（以下集成編年）2期（近藤編 1992）であることから判断して（第 10 図）、倭王とその連合政権が当地に進出するのはかなり遅れたと言える。他の破鏡ないし鏡片は表 1 を参照願いたい。

（3）古墳時代中期の鏡

①万才町（まんざいまち）遺跡の四禽文（しきんもん）鏡

同鏡は長崎市万才町遺跡（第 5 図 6）より出土している（第 8 図 16）（長崎市埋蔵文化財調査協議会 1996、長崎市史編さん委員会 2013）。舶載鏡で完形鏡である。調査区の最下層より地山に貼り付いた状態で出土した。同鏡は 1996（平成 8）年の長崎市の発掘調査報告書では「三角縁四獣鏡」で倭製鏡と報告されていたが、2013（平成 25）年の『新長崎市史』では「斜縁四獣鏡」と訂正されている。しかし倭製鏡という評価はそのままであった。下垣集成では長崎市の認定とは異なり、舶載鏡で鏡式は浮彫式獣帯鏡と記載されている（下垣 2016）。今回、辻田淳一郎の検討により四禽文鏡であることが判明した。漢鏡 7 期後半である。同遺跡が立地する場所は後に長崎奉行所西役所がおかれた岬にあり、その先端には出島が築かれた。正面には角力灘（五島灘）が広がる。周辺には石棺墓群が存在することが分かっており、副葬品であった可能性が高い。当該期に鏡が石棺の副葬品である事例が多いことからこの時期に位置付けた。

②佐世保鬼塚（おにつか）古墳の四獣鏡

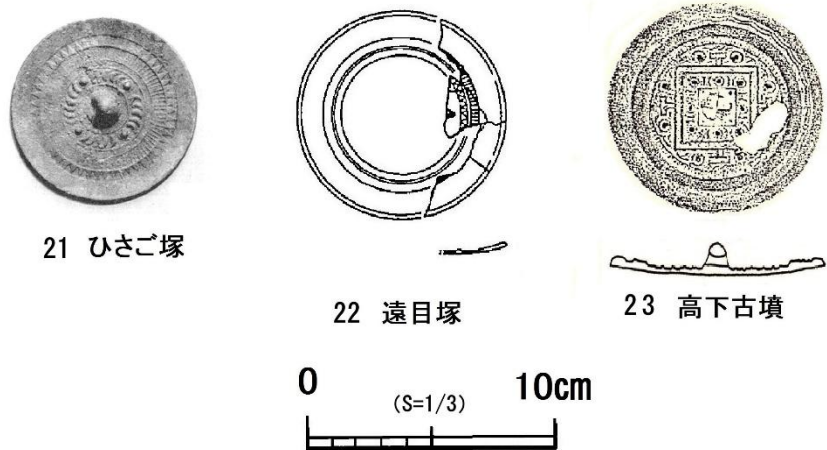
同鏡は佐世保市の鬼塚古墳（第 5 図 2）から出土しており、完形の倭製鏡である（第 8 図 20）。石室の南西部で鏡面を上に向けた状態で出土している。県本土部では初出となる鉄製甲冑が出土したことでも知られる（佐世保市教委編 2019）。同古墳は直径 17 寸の円墳で、調査指導にあたった橋本達也が佐賀県伊万里市の夏崎古墳の石室との類似を指摘している（橋本 2018）。夏崎古墳は重藤輝行によって初期横穴式石室のうちの筑肥型に比定されている（重藤 2018）。

③宮田（みやた）古墳群の珠文鏡

同鏡は長崎市外海町の宮田遺跡（第 5 図 7）の A-1 号石棺内から出土している（第 8 図 18）。完形鏡である。棺内には本県本土部で唯一出土した馬蹄形に削り抜いた石枕が納められていた。同遺跡には第 C-2 号石棺でも削り抜きの石枕が出土している（外海町教委編 1985）。

なお隣接する開遺跡でも削り抜きの石枕が発見されており、棺内には本県本土部の遺構から出土した刀剣としては最多の 3 本が副葬された開（ひらき）石棺があった（古門 2025 b）。

これらの石枕から、宮田古墳群の石棺は以前より肥後地域との関連が想定されてきた。今回、開遺跡出土石棺の鉄製武器の具体的な様相が判明したことにより、被葬者の出自や階層的な位置づけ、社会的役割などが問題となってきた。



第 9 図 肥前西部の鏡③ (S=1/3)

④ひさご塚古墳の振紋鏡

東彼杵町のひさご塚古墳（第5図3）の第2号主体部内から倭製鏡の振文鏡が出土している（東彼杵町教編1994、宮崎2019）。完形鏡である（第9図21）。同古墳は長さ59mの前方後円墳で、主体部は石棺系横口式石室である（古門2022）。ちなみに主埋葬となる第1号主体部は石棺系石室であった。

⑤遠目塚（とおめづか）遺跡の内行花文鏡

同鏡は雲仙市南串山町の遠目塚遺跡（第5図4）の石棺から出土している（第9図22）（長崎県教委編1978）。倭製鏡である。北東側の棺床から鏡片が4つに分散して出土した。鈕の部分欠損し、全体の3分1程度しか残っていない。

（4）古墳時代後期の鏡（註4）

①高下（こうげ）古墳の方格T字鏡

雲仙市国見町の高下古墳（第6図1）から方格T字鏡が出土している（第9図23）（小田1979）。下垣集成では舶載鏡とされており、完形鏡である。徳富孔一によれば方格T字鏡には5種類が存在し、本鏡は「日韓出土の方格T字鏡」の「十二支帯鏡群」に属す（徳富2019）。同群は1990年代前半まで倭製鏡とされていたものだが、1990年代後半以降、舶載鏡で西晋鏡ないし晋（東晋）鏡と見られるようになっている（徳富2020）。しかし舶載鏡か、あるいは倭製鏡とは異なる日本列島製かという問題は今後の課題であるという（徳富前掲）

（5）古墳時代終末期の鏡

これまでに本県本土部での当該期の鏡の出土例はない。

（6）小結

ここでは当地の弥生時代終末から古墳時代の鏡の出土状況から窺える当時の社会状況を推定してみたい。前方後円墳の出現が遅れたことは、鏡の面から見ても窺える。当地で弥生時代終末から古墳時代初頭の完形鏡や破碎鏡が今日まで島嶼部の平戸市田助遺跡しか知られていないことは、倭王権ならびにその親和的勢力と当地の地域有力者や地域集団との連合が遅れたことの反映と考えられる。

また、続く古墳時代前期に完形鏡や破碎鏡を出土した墳墓を見る限り、いずれも非前方後円墳であり、その立地から見て、当地に進出途上であった倭王権が海上交通の要衝を押さえていた地元有力者に懐柔のため下賜したと推定される。

当地で前方後円墳被葬者が鏡を副葬するのは中期になってからであり、一方で非前方後円墳被葬者は前代に引き続き鏡を保有している。また、前方後円墳の分布から見て中期には既に倭王権ないしその親和的勢力と当地の有力集団との連合が成立したと推測する。中期の当地の社会階層は宇野慎敏や福田一志の研究により、前方後円墳被葬者階層と前方後円墳以外の古墳被葬者階層、さらに石棺などの非古墳被葬者階層という3階層が想定されている（福田1994、宇野2014）。中期の鏡の有り方からすると、当地に進出した倭王権とその親和的勢力は、三つの社会階層のうち主に中位や下位の有力者に倭製鏡を配布し、懐柔しようとした様相が窺える。その目的は万才町遺跡、宮田古墳、遠目塚古墳の各遺跡の立地から見て西北九州の外洋航海ルート上にあることから、同ルートの開発、整備のためであろうと筆者は推測している（古門2023）。

古墳時代後期以降に関しては後ほど総括したい。

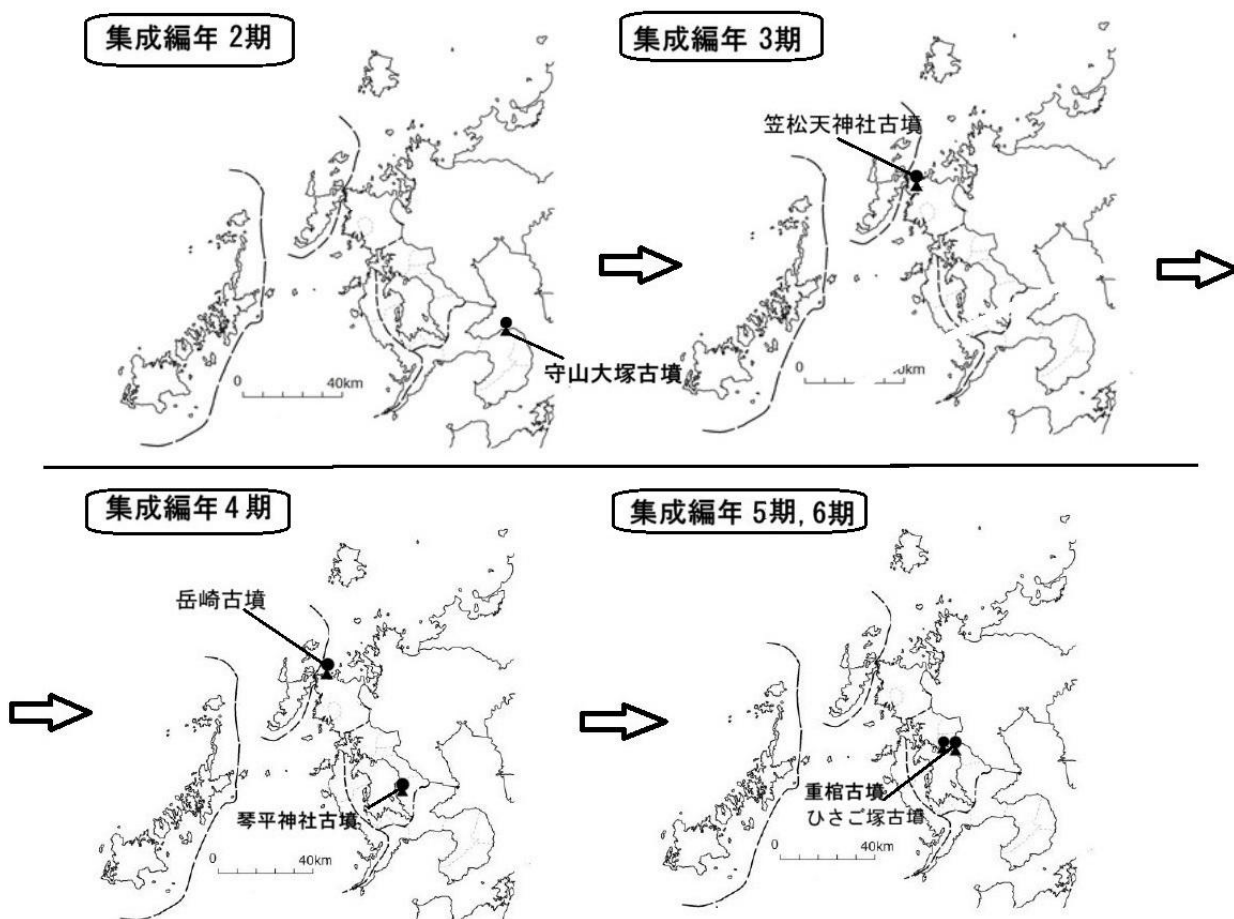
4 倭王権ないしその親和的勢力の進出に果たした鏡の役割

(1) 弥生時代終末から古墳時代中期初頭

当地のこの時期は前述したように倭王権が西方へ進出する途上であるが、地域の有力集団との間での連合を示す鏡の存在は知られていない。当該期の主な鏡としては①上方作系浮彫式獣帯鏡（第7図2）：平戸市田助古墳と②長宜子孫内行花文鏡（第8図14）：平戸市勝負田古墳。③四獣鏡（下垣編年では鼉龍鏡）（第8図13）：伝諫早邑などがある。①②はマツラ西部に進出した倭王権とその親和的勢力からの賜物か、独自ルートからの入手のいずれかであろう。壱岐水道を往来する海上交通の要衝をおさえる役割を期待されてのことと推定する。③は諫早湾と大村湾の往来の要衝を押さえるため、倭王権とその親和的勢力から下賜されたものと推定される。いずれにせよ当該期の鏡は倭王権の進出に伴い、海路および陸路の要衝を押さえるために鏡が用いられたと考えられる。

(2) 古墳時代中期

この時期の当地では後述するように既に倭王権との連合が成立しており、同王権との関係を示す鏡も現れる。この時期の鏡としては①四禽文鏡（第14図16）：万才町遺跡②四獣鏡（第8図20）：佐世保鬼塚古墳③珠文鏡（第14図18）宮田古墳群：④振紋鏡（第15図21）ひさご塚古墳：⑤の内行花文鏡（第9図22）：遠目塚遺跡などがある。①③⑤は西北九州外洋航路沿いに存在し、倭王権と

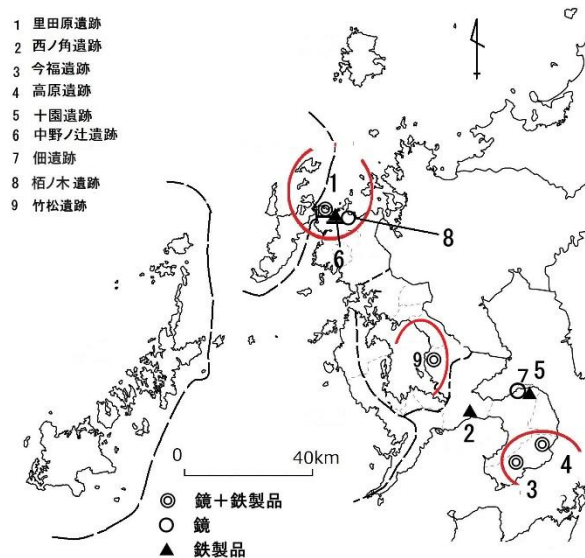


第10図 前方後円墳の編年

その親和的勢力の朝鮮半島への軍事進出のため外洋航路の整備にあたらせ、その見返りとして下賜されたと推定する。②は当地の中位の有力者に下賜された鏡で ④は当地の上位の有力者に下賜された鏡と考えられる。

(3) 古墳時代後期

この時期の鏡には①方格 T 字鏡 (第 9 図 23) : 高下古墳がある。この時期の当地で唯一の舶載鏡を保有しており、倭王権の地域支配が進んだ結果、同王権から承認された地域の最有力者と推定する。



第 11 図 弥生時代後期の地域集団と有力集団

5 前方後円墳の分布と編年からみた倭王権の進出

第 10 図は集成編年に準じて本県本土部の前方後円墳の分布を示したものである (註 5)。長崎県本土部で最も古い前方後円墳はタカク北部の守山大塚古墳で集成編年 2 期の古墳である (註 6)。前方後円墳が倭王権との連合の象徴であるとするれば、同王権はまず島原半島北部に橋頭保を築いたと言えよう。その後、集成編年 4 期になるとソノキに琴平神社古墳、同 5、6 期のソノキ北部に重棺 (かさんがん) 古墳、ひさご塚古墳と築造されて、マツラ西部との境界に達している。このことから倭王権は、タカク北部 (島原半島北部) に進出した後に、西へ勢力を拡大していったと考えられる。

一方、マツラ西部では集成編年 3 期に笠松天神古墳が築造され、同 4 期に岳崎古墳が続く。両古墳の本貫地は平戸市里田原遺跡を中心とした有力な地域集団と想定され、同集団は古代まで継続している。

このようにソノキ、タカクとマツラ西部では前者の有力集団が流動的で、移動しているように見えるのに対し、後者は継続的で安定しており、その様相が異なると言えよう。

6 地域集団の動向と倭王権

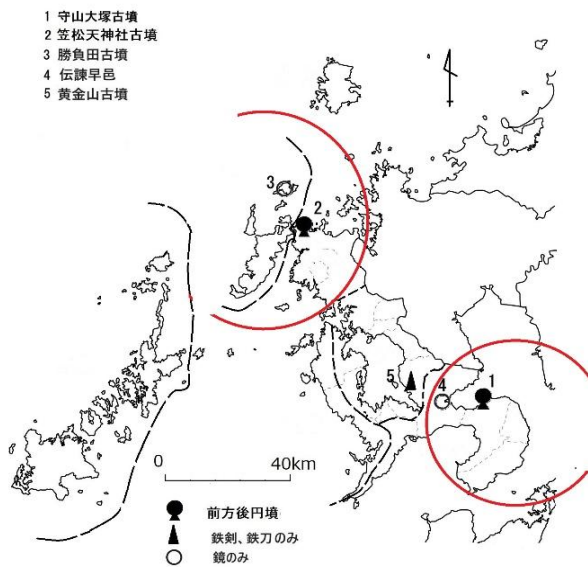
ここからは当地の地域集団の動向を土器と土器以外の遺物や遺構から推定し、改めて同王権の進出状況を考察するとともに、鏡との関係を検討していく。通史的理解を助けるため弥生時代後期から見ていく。

(1) 土器の変遷からみた地域集団の動向と倭王権の進出

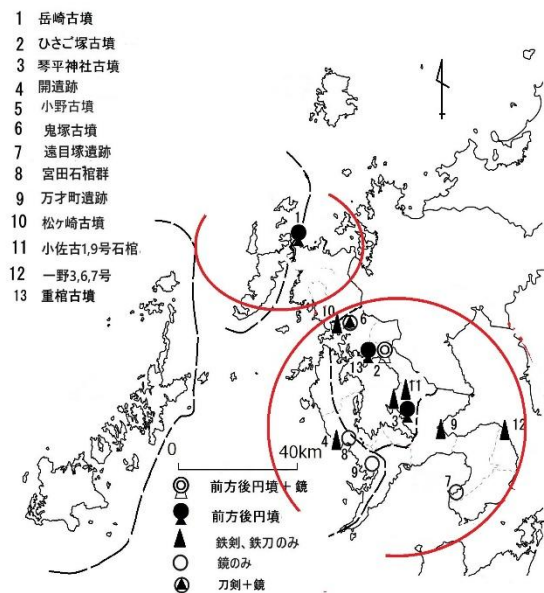
当地の弥生時代後期初頭の土器に逆 L 字口縁の台付甕と、くの字口縁の台付甕が出現し、次第にくの字口縁の台付甕が主体となっ



第 12 図 弥生時代終末から古墳時代初頭の地域集団と有力集団



第13図 古墳時代前期の地域集団と有力集団



第14図 古墳時代中期の地域集団と有力集団

て後期中頃に至る。後期後半にはタカク南部に「島原半島系土器」が成立し（註7）、弥生時代終末にかけて佐賀県武雄市の六角川流域、熊本県宇土半島、鹿児島県の北薩地方にも局所的かつ時限的ながらも分布を広げる。「島原半島系土器」は長崎県本土部で初めて成立した土器様式であり、島原半島南部の海民によって広く拡散した土器様式と推定される（古門 2024b）。

一方、同じく弥生時代後期後半のタカク北部では島原半島系土器と併せて、熊本県の菊池川流域に分布する野部田式土器の影響を受けた在地土器が成立する。しかし野部田式土器の影響力は弥生時代終末のある時点で失われる（古門 2025a）。

次の古墳時代初頭の当地の土器の様相は、2017（平成29）年10月7日に開催された第19回九州前方後円墳研究会長崎大会での大村市竹松遺跡の出土土器見学会の所見において知ることができる。具体的には「（竹松遺跡が所在する）大村（ソノキ）では、伝統的V様式土器（B系統）の土器がまず入って、その後に布留式土器が入ったと考えられる。布留式系土器が入るのは佐賀平野よりもやや遅れるのではないか。土師本村1式併行期まで下ると思われる」という評価であった。

また、個別の遺跡出土土器の編年に関しては、「大村市冷泉遺跡出土土器が久住編年II A併行で、雲仙市龍王遺跡出土土器は同II B併行」とされた（註8）。このように現状ではタカク北部（島原半島北部）では布留式系土器が隣接するタカク南部やソノキよりも早い時期に入ってきたと言えよう。このことは当地で最も古い前方後円墳がタカク北部に出現することと極めて整合的である。そのため龍王遺跡の、とりわけ同遺跡の方形環溝から出土した布留式系土器が、どの地域からもたらされ、いかなる政治勢力がその背後に存在したかという歴史的事実が本県南部での倭王権の進出を復元するうえで、大変重要な問題となってくる。

（2）土器以外の遺物遺構から見た地域集団の動向と倭王権の進出

ここからは当地の地域勢力の動向を土器以外の鏡、鉄製品、横穴式石室の玄室面積などから推定

し、倭王権とその親和的勢力の本県本土部への進出状況を予察したい。通史的な理解を助けるため弥生時代後期から見ていく（古門 2024a）。

地域集団の抽出にあたって指標としたのは弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての遺構から出土した鉄製品の有無である。続く古墳時代前期から中期にかけては前方後円墳と遺構出土の刀剣を指標とし、古墳時代後期では横穴式石室の玄室の床面積を指標とした。さらに抽出した地域集団の中で、鏡と指標となる遺構遺物を併せ持つ集団を有力集団とし、他の地域集団との差別化を図った。以上のことは第 11 図から第 15 図に整理した。

半円形のラインは有力集団を含む地域集団の集中範囲を示す。一見して分かることは第 11 図に見られるような弥生後期に存在した島原湾に面したタカク南部の有力集団が第 12 図では消えており、併せて第 12 図にあった橘湾沿岸の有力集団も第 13,14 図の古墳時代前期および同中期には消えていることである。

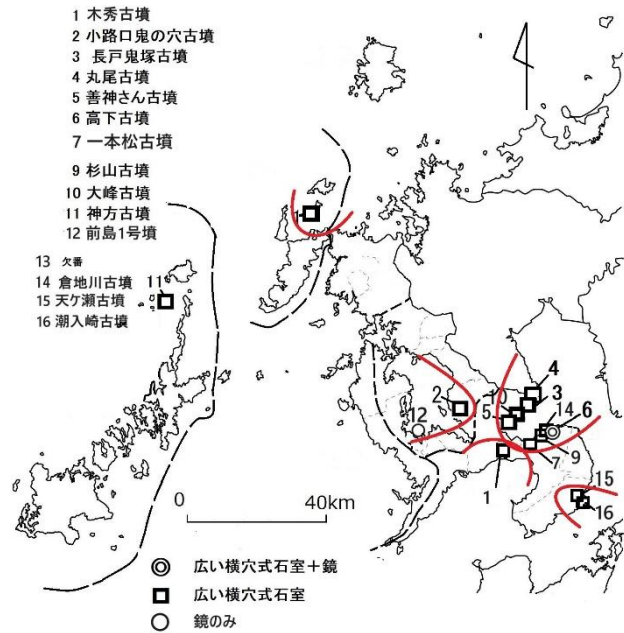
一方、マツラ西部やソノキは地域集団の数こそ異なるものの、その分布状況に大きな変化はない。このことは、弥生時代終末から古墳時代初頭のタカクに大きな政治的、社会的な変化が生じたことを示していると言わざるをえない。これまで当地の前方後円墳の分布状況などから倭王権が最初にタカク北部（島原半島北部）に進出したことを指摘したが、地域の有力集団の動向はそのことを反映していると推定する。具体的には第 12 図に示した龍王遺跡の方形環溝の出現（同図 13）と、第 13 図に示した守山大塚古墳（同図 1）の出現によって有力な地域集団の動向に大きな変化が生じたと言えよう。背景には倭王権とその親和的勢力の進出があったと推測する。

続く古墳時代中期になると集成編年の 4 期にソノキに前方後円墳が現れ、同 5,6 期にはソノキ北部に到達し、マツラ西部と境を接することになる。このことから筆者は古墳時代中期に倭王権とその親和的勢力が前期のタカクに続いてソノキの地を押さえたと考えている（第 14 図）。

しかし第 15 図の古墳時代後期に目を転じると、タカク南部の島原湾沿岸および橘湾北部で地域集団が再び出現している。このことは、弥生時代後期から続く地域集団が古墳時代に入って消滅したのではなく、その間雌伏しており、その後復権したのか、あるいは新たな地域集団が誕生したかのいずれかであったと推定する。いずれにしても背景に大きな政治的社会的変動があったことが考えられるが、筆者はこの社会変動を 527 年から始まった磐井の乱と推定している。

（3）小結

ここまで本県本土部の前方後円墳の時期別の分布と、鏡や土器や鉄器などの遺構遺物の出土状況から検討した地域集団の動向から倭王権とその親和的勢力は、まずタカク北部に橋頭保を築き、その後西進したと推定した。その契機は古墳時代初頭に出現した龍王遺跡の方形環溝と守山大塚古墳の出現であったと考えた。その影響は地域集団の動向に反映され、具体的には弥生時代後期から古墳時代初頭まで確認されていたタカク南部や橘湾沿岸の有力な地域集団の存在が見かけ上、古墳時代前期以降消滅した結果にあらわれている。このことは同時期に当地が新たに進出した倭王権とその親和的勢力の影響下に置かれたと推測した。続く古墳時代中期には前方後円墳がソノキにも築造され



第 15 図 古墳時代後期の地域集団と有力集団

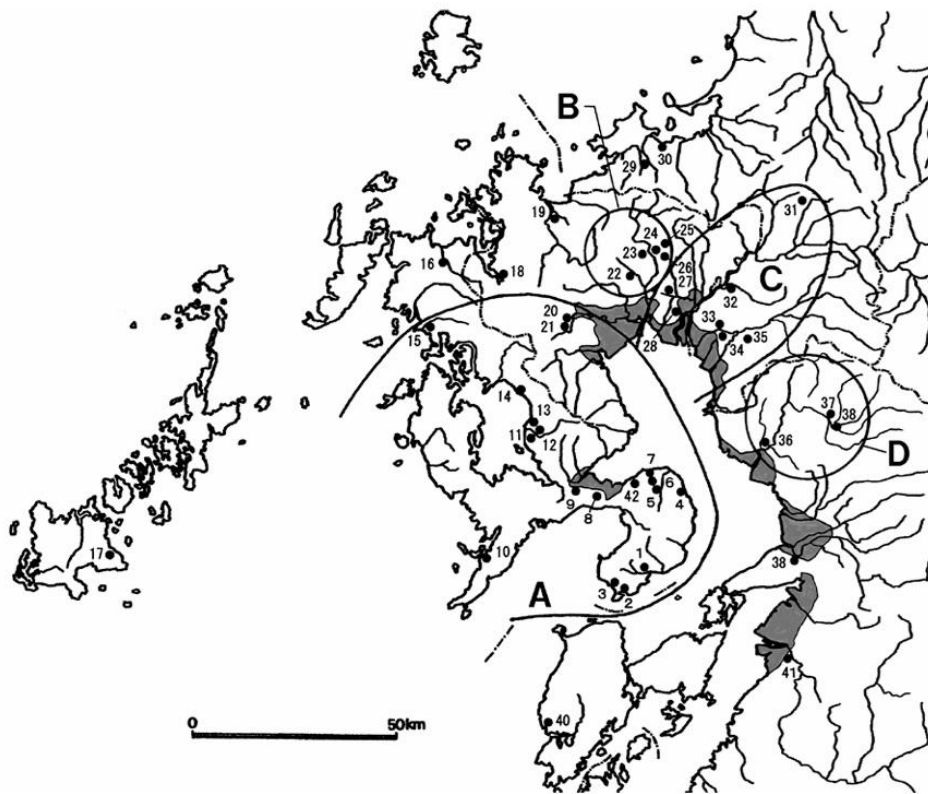


図1 「肥前型器台」の地域圏と関連遺跡

第16図 「肥前型器台」の地域圏と関連遺跡（宮崎2022より）

るようになり、この時点でソノキもタカクに続き倭王権の勢力下に置かれたと考える。即ち倭王権と地元の有力首長との連合が成立したと推定する。

しかし古墳時代後期になると、見かけ上消えたと思われたタカク南部や橘湾岸の有力集団が再び顕在化しており、あたかもその勢力が復活したか、新興勢力の台頭かのような印象を受ける。その原因としては磐井の乱のような大きな政治的社会的変動が影響したと推測した。

7 倭王権はどこからやって来たのか

最後に弥生時代終末から古墳時代初頭にタカク北部に進出し、影響力を行使した倭王権ないしその親和的勢力は一体どこからやって来たのかという問題を予察してまとめたい。

宮崎貴夫は弥生後期後半から古墳時代初頭に有明海沿岸地域で用いられた装飾器台である肥前型器台の形状をもとに4つの地域に分けた（第16図）。タカク北部に進出して橋頭保を築いた政治勢力は、この4地域の中のいずれかの地域から来た可能性が高い。宮崎はこれらの地域をAからDと呼称しているが、本稿では、A地域を長崎県本土部・武雄市六角川流域、B地域を佐賀平野（嘉瀬川・牛津川流域）、C地域を筑後平野（筑後川・矢部川流域）、D地域を菊池盆地（菊池川流域）と呼び変える。隣接地で言えば肥後平野（白川・緑川流域）もあるが、同地域は弥生時代後期より島原半島との関りが希薄な地域であるため（古門2025a）、本稿では除外した。

結論を先に述べるとタカク北部に進出した倭王権とその親和的勢力は、Bの佐賀平野の勢力かCの筑後平野の勢力のいずれかではないかと推測する。後者とする根拠は、前述の雲仙市龍王遺跡の方形環溝と大分県日田市の小迫辻原遺跡の方形環濠が極めて類似している点である（註9）。日田は豊

後に属するが、筑後川上流に位置するところから歴史的には同流域の文化と重なるところが多い。筑後平野を中心としてその対極に位置する日田と島原に類似した方形環溝が存在することに意味を見出したい。かたや前者の佐賀平野から進出してきたとするには、龍王遺跡の方形環溝から出土した布留式系土器が佐賀平野のそれか、その系譜であることを明らかにすることが必要となる。

その他の候補地であるDの菊池盆地の勢力は、前述のように弥生時代後期後半に野部田式土器を通してタカク北部に影響を及ぼしているが、弥生時代終末にはそれが失われており、候補地には成り得ないため対象外とした。またAの武雄市（六角川流域）の勢力は島原半島系土器の分布範囲で同半島との関連が強いと判断し、候補地からはずした。

以上のことから島原半島北部に進出した倭王権とその親和的勢力は筑後平野か佐賀平野の政治勢力ではないかと推測する。

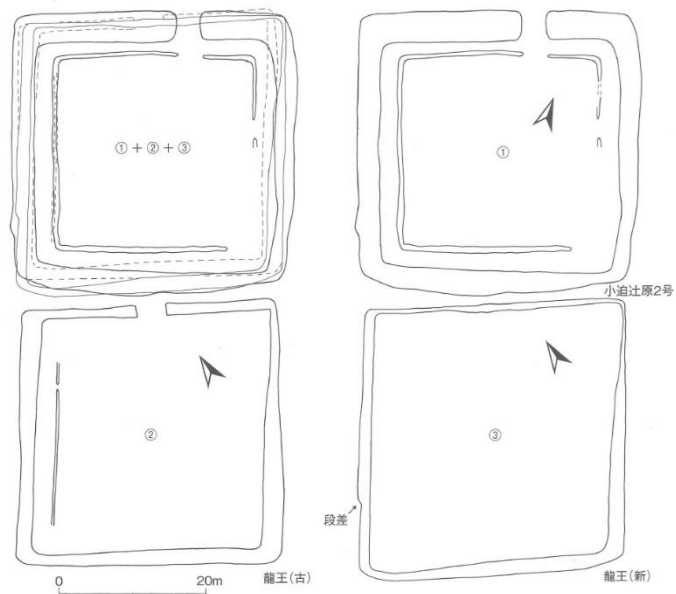
本稿は2025（令和7）年6月7,8日の両日に雲仙市で開催された第24回九州前方後円墳研究会長崎大会での報告文を論攷の体裁に編集し、改稿したものである。論旨に大きな変更はない。

本稿を執筆するにあたり辻田直人、野澤哲朗、宮崎貴夫、渡邊康行の各氏には大変お世話になった。芳名を記して感謝する。

2025（令和7）年7月21日 脱稿

【註】

- 註1** 立小路遺跡からは異体字銘帯鏡ないし方格規矩鏡片、門前遺跡では異体字銘帯鏡片、有喜上原遺跡では虺龍紋鏡 ないし内行花文鏡片が出土している（古門 2023）。
- 註2** 宮崎貴夫は内行花文鏡を副葬した松浦市の栢ノ木（かやのき）遺跡も同時期とする（宮崎 2019）
- 註3** 宮崎貴夫は、かつて勝負田古墳出土鏡を四葉座V B式の内行花文鏡としていたが（宮崎 2019）、今は樋口隆康のAa エ式と認識している。
- 註4** 前稿「西海の鏡」（古門 2023）では古墳時代後期の諫早市飯盛古墳から鏡が出土した旨を記載した。根拠としたのは国立歴史民俗博物館の全国的な鏡の集成である（国立歴史民俗博物館編 1994 以下 歴博集成とする）。歴博集成の本県本土部では飯盛町後田名の鬼塚古墳が挙げられ、備考には「北高来郡飯盛町江の浦の個人が掘り出したと伝えられている」と記載されている。しかし出典として挙げられた酒詰 1967 にも、津田 1940 にもそのような記述はない。一方で岡崎 1976 には飯盛町江の浦の箱式石棺か



第 17 図 龍王遺跡と小迫辻原遺跡の比較（雲仙市教委 2008）下段は龍王遺跡の新旧の方形環溝、上段右は小迫辻原遺跡の 2 号方形環溝。上段左は 3 者を重ねたものである

ら鏡が出土したことが記載されている。同鏡は酒詰が発掘したもので、前述の同氏の著書にも明記されており、発見年の1941年12月という年月日も合致する。したがって江の浦の石棺から鏡が出土したのは事実と見られる。しかし歴博集成ではこの石棺出土の鏡のことは記載されていない。他方、下垣集成では鬼塚古墳と石棺の両者が掲載され、鬼塚古墳の備考には歴博集成と同じく、個人が掘り出したことが書かれている。しかし同古墳の所在地は歴博集成の飯盛町後田名ではなく、同町下釜名になっている。さらに下垣集成では岡崎集成や酒詰の著者に記載されている石棺から鏡とともに出土した玉類が鬼塚古墳の出土品として掲載されており、齟齬が見られる。筆者はこのような集成間の相違を是正すべく精査したが、未だ整理がついていない。今後の課題とする。

- 註5** 大村市に所在するもの前方後円墳と確定できない石走り1号墳や茶屋の辻古墳などは、本稿では検討対象から除外した。
- 註6** 2025(令和7)年3月に雲仙市教育委員会から守山大塚古墳の非破壊による調査報告書が刊行された(雲仙市教委編2025)。墳頂部に近世以来建てられた墓石群に阻まれ、発掘調査ができない当古墳に新たな知見を加えた。考察は野澤哲朗による。
- 註7** 「島原半島系土器」を提唱したのは石橋新次である(石橋2011)
- 註8** 長崎県教育庁新幹線文化財調査事務所の復命書による。
- 註9** 龍王遺跡の方形環溝は発見当時から小迫辻原遺跡のそれと類似することが注目されていた。発掘調査報告書には、「同じサイズで」「布堀溝の位置も同じ」「偶然とは言い難い」「直線で80^{cm}の距離の両遺跡に密接な関連性が見て取れないだろうか」などと記述されている(雲仙市教委編2008)

【引用・参考文献】

- 石橋新次 2011 「有明海を巡る地域間交流」佐賀県地域を軸に『環有明海の交流—台付甕をめぐる諸問題—』肥後考古学会・長崎県考古学会資料集
- 雲仙市教委 2008 『龍王遺跡Ⅲ』(縄文時代・古墳時代編) 国見中部地区県営圃場整備事業に伴う発掘調査 雲仙市文化財調査報告第3集 雲仙市教育委員会
- 雲仙市教委編 2025 『守山大塚古墳Ⅱ』雲仙市文化財調査報告書第21集 雲仙市教育委員会
- 宇野慎敏 2014 「九州島における4・5世紀の様相(3) —肥前(3)—」『つどい』315号 豊中歴史同好会
- 岡崎 敬 1976 「日本における古鏡発見地名稿 九州Ⅰ」『東アジアより見た日本古代墓制研究』
- 小田富士雄 1979 「第16章 長崎県高下古墳」『九州考古学研究』古墳時代編 小田富士雄著作集2 学生社
- 恩田裕之 2012 「古墳時代のお墓」平成23年度 やさしい考古学講座資料 (公財) 岐阜市教育文化振興事業団 埋蔵文化財調査事務所 https://gikyobun.or.jp/maibun/file/KozaShiryoh23_4.pdf
- 京都大学平戸学術調査団編 1951 『平戸学術調査報告』京都大学平戸学術調査団
- 国見町教委編 1959 『高下古墳』国見町教育委員会
- 近藤義郎編 1992 『前方後円墳集成』シリーズ 九州編 山川出版社
- 酒詰仲男 1967, 2004 『貝塚に学ぶ』学生社
- 佐世保市教委編 2019 『鬼塚古墳』佐世保市文化財調査報告書第17集 佐世保市教育委員会
- 佐世保文化財調査事務所編 2010 『門前遺跡Ⅲ・武辺城跡Ⅱ』佐世保文化財調査事務所調査報告第5集 長崎県教育委員会
- 重藤輝行 2018 「おじよか古墳の横穴式石室と九州」『おじよか古墳発掘50年記念シンポジウム「おじよか古墳と5世紀の倭」記録集』志摩市教育委員会
- 下垣仁志 2016 『日本列島出土鏡集成』同成社
- 下垣仁志 2022 『鏡の古墳時代』歴史文化ライブラリー547 吉川弘文館
- 新幹線文化財調査事務所編 2018 『竹松遺跡Ⅲ』新幹線文化財調査事務所調査報告書第6集 長崎県教育委員会

- 杉本欣久 2016 「江戸時代における古美術コレクションの一樣相—古鏡の収集と出土情報の伝達—」『古文化研究』
第 15 号 黒川古文化研究所
- 外海町教委編 1985 『宮田古墳群』外海町文化財調査報告第 3 集 外海町教育委員会
- 辻田淳一郎 2019 『鏡の古代史』株式会社 KADOKAWA 角川選書
- 辻田淳一郎 2021 「古墳時代開始前後における西北九州地域の鏡とその変遷」『史淵』158 九州大学史学会
- 津田繁二 1940 「我が長崎県の先史時代及び原始時代の遺跡遺物の概略について」『長崎談叢』第 26 輯 長崎史談会
- 時津町教委編 1991 『前島古墳群』時津町埋蔵文化財調査報告書第 1 集 時津町教育委員会
- 徳富孔一 2019 「古墳年代からみた日韓出土方格 T 字鏡 十二支帯鏡群の型式学」『考古学研究』第 66 巻第 3 号
通巻 263 号 考古学研究会
- 徳富孔一 2020 「安養寺裏山古墳出土方格八鳳鏡と中国製方格 T 字鏡」『遺跡』第 53 号 遺跡発行会
- 長崎県教委編 1978 「遠目塚遺跡の調査」長崎県埋蔵文化財調査集報 I 長崎県文化財調査報告書第 35 集 長崎県
教育委員会
- 長崎県教委編 1985 『今福遺跡 II』長崎県文化財調査報告書第 77 集 長崎県教育委員会
- 長崎県教委編 1989 「大屋敷遺跡」長崎県埋蔵文化財調査集報 XII 長崎県文化財調査報告書第 94 集 長崎県教育委
員会
- 長崎県教委編 1995 『万才町遺跡』長崎県文化財調査報告書第 123 集 長崎県教育委員会
- 長崎県教委編 2002 『長崎県埋蔵文化財調査年報』9 長崎県文化財調査報告書第 164 集 [平成 12 年度調査分]
- 長崎県教委編 2006 『門前遺跡』長崎県文化財調査報告書第 190 集 長崎県教育委員会
- 長崎県教委編 2008 『門前遺跡 II』長崎県文化財調査報告書 第 190 集 長崎県教育委員会
- 長崎県教委編 2018 『立小路遺跡』長崎県文化財調査報告書第 216 集 長崎県教育委員会
- 長崎市史編さん委員会 2013 『新長崎市史』第 1 巻 長崎市
- 長崎市埋文調査協議会 1996 『万才町遺跡』一朝日生命ビル建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一 長崎市埋蔵文
化財調査協議会
- 橋本達也 2018 「おじょか古墳の横穴式石室と九州」『おじょか古墳発掘 50 年記念シンポジウム「おじょか古墳と 5 世
紀の倭」記録集』志摩市教育委員会
- 東彼杵町教委編 1990 『白井川遺跡 II』東彼杵町文化財調査報告書第 4 集 東彼杵町教育委員会
- 東彼杵町教委編 1991 『ひさご塚古墳』東彼杵町文化財調査報告書第 5 集 東彼杵町教育委員会
- 東彼杵町教委編 1994 『ひさご塚古墳 (II)』東彼杵町文化財調査報告書第 6 集 東彼杵町教育委員会
- 平戸市史編纂委員会編 1995 『平戸市史』自然・考古編 平戸市
- 福田一志 1994 「IV まとめ」『前島古墳群 II』時津町文化財調査報告書第 2 集 時津町教育委員会
- 古門雅高 2022 「前方後円墳分布周縁地域の社会—長崎県本土部の古墳時代前期および中期を中心に—」『西海考古』
第 12 号 西海考古同人会
- 古門雅高 2023 「【研究ノート】「西海の鏡」<https://saikaikouko.jp/manpitusakuhin/kagami.pdf>
- 古門雅高 2024a 「【研究ノート】続・長崎県本土部の地域集団の存在と動向—弥生時代中期から古墳を中心に—」
<https://saikaikouko.jp/manpitusakuhin/zokuchiikisyudan.pdf>
- 古門雅高 2024b 「【研究ノート】長崎県南島原市二本樋遺跡出土の「島原半島系土器」
<https://saikaikouko.jp/manpitusakuhin/shimabara.pdf>
- 古門雅高 2025a 「【概説】長崎県の弥生時代中期後半から後期の土器—ソノキ (彼杵)、タカク (高来)、スカ (周賀 :
長崎市近郊) を中心に—」
<https://saikaikouko.jp/manpitusakuhin/k2oukinodoki.pdf>
- 古門雅高 2025b 「【史料紹介】長崎市外海町開遺跡出土の鉄製武器」『紀要長崎学』第 9 号 長崎市長崎学研究所
- 宮崎貴夫編 2019 『長崎地域の考古学研究』自費出版

表1 弥生時代終末から古墳時代の肥前西部出土鏡一覧

No	分布図番号	鏡番号	出土地				鏡式名	面径 cm	完成 破片	製作時期	文献	下掘 番号	特記事項	
			遺跡	所在地	種別	遺構								時期
1	第3図10	第13図1	田助古墳	平戸市大久保町	墓地	箱式石棺	弥生終末	内行花文鏡	—	破片	—	1	57	
2	第3図10	第13図2	田助古墳	平戸市大久保町	墓地	箱式石棺	弥生終末	上方作系浮彫式 獸帯鏡	—	完形	—	2	56	
3	第3図3	第13図3	門前遺跡	佐世保市下本山町		遺物包含層	弥生終末から古墳初期	複波文縁方格規矩鏡?	約10	破片(破鏡)	—	3	52-2	
4	第3図6	第13図4	武辺城跡	佐世保市竹辺町		遺物包含層	弥生終末から古墳初期	方格規矩鏡	10	破片(破鏡)	—	4	—	
5	第3図4	第13図5	白井川遺跡	東彼杵郡東彼杵町		遺物包含層	弥生終末から古墳初期	方格規矩鏡ないし獸帯鏡	15	破片	—	5	67	
6	第3図9	第13図6	竹松遺跡	大村市竹松町	住居	竪穴建物床面20cm上の覆土	弥生終末から古墳初期	細線式獸帯鏡	15.5~16.5	破片(破鏡)	—	6	—	
7	第3図1	第13図7	立小路遺跡	大村市鬼橋町		4区3層	弥生終末から古墳初期	異体字銘帯鏡ないし方格規矩鏡	—	破片(破鏡)	—	7	—	
8	第3図7	第13図8	大屋敷遺跡	雲仙市小浜町		包含層(第2層)	弥生終末から古墳初期	不明	8.6	破片	—	8	—	
9	第3図8	第13図9	万才町遺跡	長崎市万才町		包含層	弥生終末から古墳初期	不明	—	破片(破鏡)	—	9	66-2	
10	第3図5	第13図10	冷泉遺跡3号石棺	大村市今富町	墓地	箱式石棺 3号石棺付近	古墳初期	不明	—	破片(破鏡)	—	10	66-4	
11	第3図6	第13図11	上原遺跡(有善)	諫早市有善町	住居	竪穴住居周壁上端	古墳初期	龍文鏡か内行花文鏡(破鏡)	—	破片(破鏡)	—	11	—	
12	第3図9	第14図12	竹松遺跡	大村市竹松町		TAK2013027区旧表土	古墳初期~前期	鈕片	—	破片(破鏡)	—	12	—	
13	第4図2	第14図13	諫早邑(伝)	諫早市		伝承	古墳前期	龍鏡(完形鏡)	15.8	完形	—	13	59	
14	第4図1	第14図14	勝良田古墳	平戸市大島村	古墳	箱式石棺か石箱系石室	古墳前期後半から中期初頭	長宜子孫八弧内行花文鏡	13.8	完形	—	14	53	四葉産
15	第5図1	第14図15	岩谷口岩除遺跡	佐世保市世知原町	岩除	1区第3層	古墳前期から中期	六弧内行花文鏡	9.8	破片?	—	15	52	
16	第5図6	第14図16	万才町遺跡	長崎市万才町		包含層	古墳前期から中期	四禽文鏡	7	完形	—	16	66-1	
17	第3図8	第14図17	万才町遺跡	長崎市万才町		包含層	古墳前期から中期	素文鏡	7.4	完形	—	17	66-3	
18	第5図7	第14図18	宮田A-1号石棺	長崎市下黒崎町	墓地	箱式石棺	古墳前期から中期	珠文鏡	6.8	完形	—	18	66	
19	第5図5	第14図19	山の寺遺跡	南島原市深江町		表探	古墳前期から中期	垂圓文鏡(完形鏡)	5.8	完形	—	19	—	
20	第5図2	第14図20	佐世保鬼塚古墳	佐世保市宮津町	墓地	初期横穴式石室	古墳中期	四獸鏡	11.5	完形	—	20	52-1	
21	第5図3	第15図21	ひさご塚古墳第2主体部	東彼杵郡東彼杵町	墓地	石箱系横口式石室	古墳中期	振文鏡	7.4	完形	—	21	67-1	
22	第5図4	第15図22	遠目塚1号石棺	雲仙市南串山町	墓地	箱式石棺	古墳中期	内行花文鏡	8.3	破片	—	22	65	
23	第6図1	第15図24	高下古墳	雲仙市園見町	墓地	横穴式石室	古墳後期	方格1字八鳳鏡	8.6	完形	—	23	62	
26	第6図2	—	前島1号墳	西彼杵郡時津町	墓地	円墳・横穴式石室	古墳後期	不明	9.5	不明	—	26	—	

表2 文献一覧

No	著者・編者	刊行年	文献	発行
1	京都大学平戸学術調査団	1951	『平戸学術調査』	京都大学平戸学術調査団
2	京都大学平戸学術調査団	1951	『平戸学術調査』	京都大学平戸学術調査団
3	長崎県教委編	2006	『門前遺跡』長崎県文化財調査報告書 第190集	長崎県教育委員会
4	佐世保文化財調査事務所編	2010	『門前遺跡Ⅲ・武辺城跡Ⅱ』佐世保文化財調査事務所文化財調査事務所調査報告書第5集	長崎県教育委員会
5	東彼杵町教委編	1990	白井川(Ⅱ) 東彼杵町文化財調査報告書第4集	東彼杵町教委
6	新幹線文化財調査事務所編	2018	『竹松遺跡Ⅲ』新幹線文化財調査事務所調査報告書 第6集	長崎県教育委員会
7	長崎県教委編	2018	『立小路遺跡』都市計画道路池田沖田線街路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ 長崎県文化財調査報告書第216集	長崎県教育委員会
8	長崎県教委編	1989	『大屋敷跡』長崎県埋蔵文化財調査集報XI	長崎県教育委員会
9	長崎県教委編	1995	『万才町遺跡』長崎県文化財調査報告書第123集	長崎市
10	大村市教委編	2003	『黒丸遺跡ほか発掘調査概要』Vol. 大村市文化財調査報告書 第25集	大村市教育委員
11	諫早市教委編	2007	『諫早市文化財調査年報Ⅰ』諫早市文化財調査報告書第20集	諫早市教育委員会
12	新幹線文化財調査事務所編	2018	『竹松遺跡Ⅲ』新幹線文化財調査事務所調査報告書 第6集	長崎県教育委員会
13	杉本欣久	2016	『江戸時代における古美術コレクションの一樣相－古鏡の収集と出土情報の伝達－』『古文化研究』第15号	黒川古文化研究所
14	京都大学平戸学術調査団	1951	『平戸学術調査』	京都大学平戸学術調査団
15	片岡肇編	1976	岩谷口遺跡群の発掘調査	世知原町教委、財団法人古代学協会
16	長崎市史編さん委員会編	2013	『新長崎市史』第1巻	長崎県教育委員会
17	長崎県教委編	1995	『万才町遺跡』長崎県文化財調査報告書第123集	長崎市
18	外海町教委編	1985	『宮田古墳群』外海町文化財調査報告書第3集	外海町教育委員会
19	深江町教委編	2006	『権現脇遺跡』深江町文化財調査報告書第2集	深江町教育委員会
20	佐世保市教委編	2019	『鬼塚古墳』佐世保市文化財調査報告書第17集	佐世保市教育委員会
21	東彼杵町教委編	1994	『ひさご塚古墳(Ⅱ)』東彼杵町文化財調査報告書第6集	東彼杵町教育委員会
22	長崎県教委編	1978	『遠目塚遺跡の調査』長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅰ 長崎県文化財調査報告書 第35集	長崎県教育委員会
23	国見町教委編	1959	『高下古墳』	国見町教育委員会
23	小田富士雄	1979	第16章 長崎県高下古墳』『九州考古学研究』古墳時代編 小田富士雄著作集2	学生社
24	岡崎敬 編	1979	『日本における古鏡 発見地名表 九州地方Ⅰ』東アジアより見た日本古代墓制研究(増補改訂版)	
25	岡崎敬 編	1974	長崎県・佐賀県・熊本県における「古鏡」発見地名表稿 九州文化史研究所紀要(通号 19)	九州大学文学部考古学研究室作成
26	時津町教委編	1991	『前島古墳群』時津町文化財調査報告書第1集	時津町教育委員会
27	正林護 編	1973	栢ノ木遺跡(中間報告)	松浦市教委
28	長崎県教委編	1985	『今福遺跡Ⅱ』長崎県文化財調査報告書第77集	長崎県教育委員会